

家をせおって歩いた

村上慧著

建築学科出身のアーチストが、二〇一四年四月から一年、発泡スチロールで作った家を背負って国内を歩いた。その経験を綴った日記をまとめたのが本書だ。

東日本大震災をきっかけに、「閉じた生活」をなんとかしたいと思い、著者が選んだのは「移動し続ける」ことだった。寝るのにかろうじて

十分なサイズの家を携帯し、その中で寝泊りしながら、行った先に建つ家の絵を描くというなんとも奇妙な生活。移動中は家を「被^{かぶ}って」歩くため、彼を見かけた人は「家が歩いてた」と写真つきでツイートする。歩くことで見えてくる小さきものたちの営みに感動し、歩行者に構わず猛スピードで走り抜けるトラック

に、いまの社会の有りようを重ねて怒る。夕方には家を置く敷地を探して、現地の人と交渉する。そんな日々を続けながら、夏は東北、冬は九州へと移動を続ける。

若さゆえの無謀と瞬発力、繊細さや鈍感、著者自身の不器用さと純粹さが、ひしひしと伝わる。ちょっと笑える「探究」に、真面目に一年を費やすこの人は、いかにも美術家だなあとニヤニヤした。（夕書房、2000円）